

一九五四年長江大洪水による犠牲者の数と 死因に関する試論

林 秀 光

はじめに

中国共産党（以下、中共）が中華人民共和国建国後に直面した最初の大規模災害は、長江全流域で発生した1954年夏の大洪水であった。国務院総理周恩来は後年、「1954年の長江大洪水の話が出るたび、みな青ざめ、早急に長江の根本的な治水を望んだ」と述懐している¹⁾。実際、洪水直後の1954年9月に開催された第1期全人代第1回会議において、周恩来は「政府工作報告」の中で中国各流域における総合開発ビジョン（原語：流域総合規画）の策定を提起した。最高指導層の危機管理意識は、この大洪水によって大きく喚起されたといっている。

それを受けて、長江流域ではソ連人専門家を招聘し、長江開発計画の策定に着手した。その過程で、「三峡ダムを長江開発の中心に据える」（原語：「以三峡工程为主体」）という方針が、「長江流域総合開発ビジョン要点報告」（原語：「長江流域総合利用規画要点報告」）の総論（以下「長江流域総合開発ビジョン要点報告（総論）」）に盛り込まれた。これによって、主管部門内で続いていた三峡ダム建設の必要性をめぐる論争は収束し、計画は推進へと大きく舵を切ったといえる。もっとも、三峡ダム計画はその後も紆余曲折を経て、最終的に1992年第7期第5回会議において建設が決定された。この際の議案説明でも、1954年の長江大洪水による「死者」が「33,000人」と報告され、三峡ダム建設の必要性を訴える重要な根拠の一つとして位置づけられた²⁾。しかし、議案説明では、同じく長江で発生した1931年と1935年の大洪水については犠牲者を「溺死」（原語：淹死）と明記し、それぞれ「145,500人」「142,000人」と具体的な数字

を挙げている。一方、1954 年の大洪水については「死者 33,000 人」と述べるにとどまり、その実数や内訳は曖昧にされたままである³⁾。

また、「図表 1：1954 年長江大洪水犠牲者のデータ（主管部門と先行研究の資料）」が示すように、主管部門の関連資料に記された犠牲者の総数は資料ごとにまちまちである。また、「溺死」なのか「病死」なのか、死因も不明瞭で、死因ごとの死者数も曖昧にされている。『中国歴史大洪水』や『中国大洪水——災害性洪水述要』など、中国の洪水の歴史に関する権威的な研究書も同様に、内実を明示せず「死者」は「約 3 万人」と断定し、これが定説になっている⁴⁾。

1954 年の長江大洪水は、歴史に残る記録的な大洪水である。その被害状況、とりわけ全人代での三峡ダム計画の決定に際して説明材料として用いられた死者数や死因の究明は、三峡ダム政策の決定において重要な意味を持つのみならず、長江の水利史、環境史、疫病史、災害史、経済史、地域史など多方面の研究にも寄与するものと考えられる。また、この洪水の犠牲者については「様々な要因により、被災者の死者数については公開されていない」とされている⁵⁾。中国における洪水分析は一般に「防汛救災」と表現され、防止策と洪水発生後の救済という二つの側面から論じられることが多い⁶⁾。その中で、近年の若手研究者による成果の多くは、洪水発生後に実施された各種救済政策に焦点を当てている。一方で、「防汛」の側面に注目した研究では、1952 年に行われた荊江大堤の強化工事や洪水を分流する「分洪区」の整備、さらに洪水時に分洪区の住民や牛・豚など重要な財産を緊急移動させた事例などが取り上げられている。これらの意欲的な研究には、地方政府の档案館資料に散在する 1954 年長江大洪水の被害状況への言及が見られる。しかしながら、長江大洪水による犠牲者の実数やその要因については、なお十分に解明されていない。歴史に残る記録的災害であった 1954 年長江大洪水の人的被害、とりわけ犠牲者の全貌を明らかにするためには、地方档案館のみならず、中央档案館における関連資料（もし存在するならば）の公開が待たれる。本稿では、主管部門の機関誌や先行研究が利用してきた被災地域の地方档案館資料、さらに被災当時現場で指揮を執った基層幹部の回顧を手がかりに、犠牲者数および死因の実態について考察する。

第一章 1992 年全人代での議案説明——「死者 33,000 人」

1954 年長江大洪水は、全流域を襲った連続的な降雨による被害がひとつの特徴であった。5 月頃からの集中豪雨によって長江中下流に位置する洞庭湖区と鄱陽湖区は、長年の最高水位を突破していた。長江上流からの洪水によって荊江大堤が決壊の危険にさらされる頃には、「兩岸の平原はすでに大規模な冠水（内水）に晒されていた。7 月になると農地の 80% 以上が冠水の被害に遭っていた」と林一山（当時は長江水利委員会主任）が翌年に述べている⁷⁾。また、王任重（当時は武漢市代理市長）も後年、「われわれは飛行機で被害状況を視察したが、そこで見たのは、見渡す限り真白な江漢平原であった。一軒の家も見えず、目に映るのは水面から顔を出す木々の梢くらいである」と回顧している⁸⁾。実際には、後述するように、現場の様子はこのような平穏なものではなく悲惨な状況であった。

1954 年長江大洪水は、「主な増水期である 7 月と 8 月の 2 か月間にわたって、長江主流と支流の洪水総量が 4587 億立方メートルに達し、堤防の排水能力を 1032 億立方メートルも超えるという、近百年来最大のものであった⁹⁾。長江中流および下流の兩岸では上流からの洪水を吸収する能力が限界に達し、激しい水流に 2 年前に補強工事が完成したばかりの荊江大堤の安全が脅かされる事態となった。そこで、荊江大堤と武漢市を死守するために、2 年前に設置された「分洪区」の住民を立ち退かせて計画分流を実施した¹⁰⁾。立ち退き住民の数は湖北省だけでも約 400 万人にのぼり、分流前のきわめて短期にそれを指揮した地方政府の重圧と労苦は並大抵ではなかったものと思われる¹¹⁾。また、こうした計画的な分流が叶わない地域では、洪水に耐え切れずに決壊した堤防や山津波による被害も甚大で、混乱を極めていた¹²⁾。5 月から 10 月までの約半年にわたる洪水との闘いによって、荊江大堤と武漢市の安全はかろうじて守られたが、経済的、人的な損失は莫大であった。この事態に、前述の周恩來の言葉通り、最高指導層が「みんな青くなっていた」のも無理はない。

にもかかわらず、この大洪水の被害状況について、林一山は 1959 年に完成した三峡ダム建設の必要性を検証する叩き台となる「長江流域総合開発ビジョ

ン要点報告（総論）」において、「水没した農田が4755万畝，被災人口が約1900万人，死者は約4900人」と認めている¹³⁾。この「長江流域総合開発ビジョン要点報告（総論）」は，1958年1月に南寧市で開かれた中共中央政治局（拡大）会議（通称，南寧会議）に林一山が提出した報告であるが，林一山は「周恩来が自ら審査閲覧（原語：審閲）した」と自著のなかで注釈をつけて説明している¹⁴⁾。この「約4900人」という数の根拠および死因は不明だが，最高指導層の黙認または承認を受けたものであることが明らかである。

後述するように，実際の被害状況は主管部門の報告よりはるかに深刻であった。「図表2：地方档案館資料にみる1954年長江大洪水犠牲者のデータ」が示すように，「内務部党组關於水災地区救済工作問題的報告」（湖北省档案館蔵）は，「激甚な被害を受けた安徽，湖北，湖南，江西，江蘇，河南，河北の7省の報告に基づくと，被災人口は5900万人あまり。その内，被災度が高い者は3900万人あまりであり，溺死と家屋の倒壊，山津波による死者は1.2万人である」としている¹⁵⁾。

この「1.2万人」の犠牲者は死因が明示されているものの，次の档案資料が示す湖北省の被災状況に鑑みると，この「内務部党组」による数字は依然として過少に見積もられていることがわかる。例えば，「1954年湖北省災情統計資料」（提要）は「全省で災害による死者は31,672人」と述べ，中華人民共和国内務部弁公庁が編集した『1954年水災地区生産救済工作資料匯編』（1955年10月印）には，「7月中旬から11月中旬まで病死者は106,274人」とある他，「(湖北省) 監利県のみで3.2万人が病死した」とされている。

監利県の病死者は「47,000人」いたとの後述の基層幹部の回顧と合わせて考えると，この「31,672人」という湖北省の死者は病死者を含まないものと思われる。したがって，長江中下流7省における溺死と家屋の倒壊，山津波による死者は明らかに「1.2万人」を上回っている。

「図表1：1954年長江大洪水犠牲者のデータ（主管部門と先行研究の資料）」が示すように，のちに「4900人」という数字は鳴りを潜め，かわりに死因を曖昧にしたまま「死者は約3万人」とされるようになった。そこには，三峡ダムの必要性を強調したい推進派による，洪水による溺死のイメージを印象づける

意図が働いたものと思われる。それ以上に問題なのは、この数字が1992年の全人代で行われた三峡ダム計画の議案説明において、「死者は33,000人」と収斂されていき、三峡ダムの建設を決定するひとつの説明材料となったことである。

第二章 犠牲者の死亡要因——洪水時の溺死と洪水後の疫病

① 王任重の「告白」

前述の通り、林一山は南寧会議およびその際に提出した「長江流域総合開発ビジョン要点報告（総論）」において、1954年長江大洪水の「死者」は「約4900人」とした¹⁶⁾。また、長委会の機関誌である『人民長江』が同年10月号に発表した許正甫の署名文章は、林一山による「死者約4900人」との説を踏襲する一方で、溺死者に注目した。この文章では、溺死者を1931年の長江大洪水の3.1%としたのである¹⁷⁾。1931年大洪水の溺死者は14.5万人のため、算出すると1954年の大洪水による溺死者は「4495人」となる。

筆者が入手できた資料で、1954年大洪水の死者を「約4900人」または溺死者を「4495人」とする記述は、前述の林一山と許正甫、および1980年代に林一山の数字を引用した李銳の3例に限られる¹⁸⁾。いずれも5000人に満たない死者数が、のちの定説である「約3万人」に増幅した経緯は不明である。とはいえ、そのうち湖北省の死者については、「図表1：1954年長江大洪水犠牲者のデータ（主管部門と先行研究の資料）」で示したように、出典が全て長弁（前身は長委会）であるとはいえ、31,600人、30,582人と31,770人と諸説がある。また、他省の犠牲者と比べても湖北省は桁違いに突出していることがわかる。

こうした一連の数字に違和感を抱くなかで、筆者はある資料を目にした。それは、1990年4月17日に王任重が、北京の人民大会堂で開催された『荊江大堤誌』の出版記念式典において行った発言である。王任重は三峡ダム計画の推進派であり、共和国の建国から1966年まで一貫して武漢市と湖北省の党と政府のトップリーダーを歴任している。また彼は1954年当時、武漢市代理市長として武漢市防汛指揮部総指揮長の立場で現場の指揮をとっていた。

王任重はこの記念式典の席で、1954 年長江大洪水の死者について、「洪水ではそれほど死者が発生しなかったが、むしろ、水が引いてから全省で約 3 万人が病死した」とあっさり「告白」してしまったのである¹⁹⁾。また、「病死」とは疫病によるものであったことを認めた。すなわち、「あの年、荊江大堤と武漢市の安全を確保するために、長江兩岸の多くの場所で分流を行い、約 400 万人を計画的に立ち退かせた。だが、水が引いて人々を戻す際、問題が生じた。というのも、帰郷にはまず家屋を修繕し（居住環境を整える）必要があったが、ちょうど麦の播種期にあたっていたため、人々はわれ先に地元へ戻ってしまい、劣悪な居住環境や衛生条件に身を置くことになった。伝染病を防ぐ措置も追い付かなかった」のである。

つまり、王任重は従来情報をくつがえし、湖北省の死者 3 万人あまりのうち、大部分は洪水による溺死ではなく、洪水後に立ち退き先から帰還した約 400 万人の間で発生した伝染病による死であることを認めたのである。これはきわめて重要な証言であったといえよう²⁰⁾。そして、この証言が首都北京にある人民大会堂という国家権力を象徴する場でなされたこと、また林一山と李伯寧（水利部副部長、1980 年代から三峡ダム計画を推進する中心的なメンバー）も同席していたことは注目し値する。前述した档案資料の内容を、主管部門の人間である李伯寧と林一山が把握していなかったとは考えにくい。言い換えれば、三峡ダム計画を推進する関係者は、1954 年長江大洪水の犠牲者の数や死因の全体像を把握できなかったとしてもその内実の一部を重々承知していたと思われる。

② 基層幹部による証言

また、王任重的「告白」にあった「湖北省では病死者が約 3 万人」という数字さえ、低く見積もられたものであることが、当時洪水との闘いの第一線で指揮をとっていた基層幹部張佑清（1954 年 5 月 7 日に成立した監利県防汛指揮部の工務科長。監利県上車湾で分流後に防汛指揮部は防汛救災指揮部に変更）の証言で明らかになる。

湖北省監利県では、「人口 64 万 4 千人のうち、62 万 5 千人が被災し、8 月末

までに 1568 人が死亡した。他方、(分流のために事前に安全な場所に立ち退かせた約 40 万人を除き) 県内に残った 20 万人あまりが堤防の上に避難したが、高温と劣悪な食糧事情、衛生環境から疫病が蔓延した。その結果、48,500 人が死亡したが、そのうちの 47,000 人が病死であった」²¹⁾。

監利県は、洪水から荊江大堤と武漢市を守る砦のような場所に位置するため、人為的に堤防を爆破するなどほかの地域よりも被害が大きかった。証言からは、監利県でも、伝染病による犠牲者が洪水との闘いによる死者を上回ることが明らかになったが、疫病の様相は洪水後に帰還者の間で広がったという王任重の回顧とは異なっていた。監利県では、分流のために人為的に決壊した堤防の回復工事が 10 月末まで続いたため、人々は堤防の上での避難生活を強いられ、ここで蔓延した疫病によっておびただしい数の犠牲者が生じた。

1954 年 7 月 22 日早朝 2 時 20 分に「荊江分洪区」において洪水の分流が開始され、27 日 13 時 10 分に一旦閘門を閉じたが、同月 29 日 6 時 15 分に分流が再開され 8 月 1 日 15 時 55 分まで続いた。洪水の勢いはなおも削がれず、同日 21 時 40 分から 22 日 7 時 50 分まで分流が続けられた²²⁾。それによって 126 億立法メートルの洪水を吸収したが、「荊江分洪区」の設計上有効な容積である 54 億立法メートルの倍を超えたため、洪水が長江に回流し荊江大堤が決壊の危険にさらされた。これに加えて、長江上流の重慶では洪水が最高位に達して、やがて下流に迫ってくる状況であった。そこで、荊江大堤と武漢市を守るために、中央防汛総指揮部(所在地は北京、中央防汛委員会との記述もある。当時のトップは政務院副総理である鄧子恢)が監利県内の長江干堤に位置する上車湾を人為的に決壊させることを決定した。8 月 7 日に湖北省防汛指揮部副指揮長夏世厚が堤防の爆破準備工事に着手し、翌日 0 時 30 分に爆破が開始された。洪水が収束に向かい、爆破カ所を塞ぐ修復工事が開始したのは 9 月 14 日であり、竣工は 10 月 24 日であった²³⁾。つまり、5 月に始まった洪水によって、人々は 10 月半ばまで約半年にわたる避難生活を余儀なくされたのである。

一方、楊傑(元湖南省常德地委宣伝部長)の回顧によると、洞庭湖盆地の北部に位置する湖南省の安郷県では、「全县の農業人口約 25 万人のうち、92%が被災し、また居住地を囲む堤防の決壊によって住処が完全に水没した(原語: 潰

垸) 者は約 15 万 1 千人あまりに達した。堤防決壊後の最たる困難は疫病の流行であった。8 月末に病人が 6 万人を超え、3 か月のうちに、疾病によって 4721 人が死亡し、そのうち 80% が体力の乏しい児童であったが、堤防の決壊による溺死者はたったの 10 人であった」²⁴⁾。湖南省でも同様に、疫病による死者が溺死者を上回り、犠牲者の多くは児童だった。こうした基層幹部の証言のほかに、「洞庭湖の湖区だけでも死者が 3 万人あまりに達した」や、「『分洪区』だけでも 3 万人が疫病にかかった」との記述も見られる²⁵⁾。

このように、1954 年長江大洪水の被災者は長期にわたって気候の急激な変化と劣悪な環境に置かれた。「最たる困難は疫病の流行」との基層幹部の回顧からもわかるように、人々が洪水後の疫病に苦しめられたことは容易に想像できよう²⁶⁾。

③ 被災地域の档案館資料にみるデータと死因

本節では、先行研究で利用された被災地域の档案館資料における 1954 年長江大洪水の犠牲者の記述を整理し、今日まで続くデータの混乱の背景を考察する。「図表 2：地方档案館資料にみる 1954 年長江大洪水犠牲者のデータ」が示唆する点は以下の通りである。

第一に、1992 年全人代での三峡ダム計画の議案説明にあった、1954 年長江大洪水による中下流 7 省または 5 省の犠牲者を 33,000 人とするデータについては、信ぴょう性の高い出典が見られない。

第二に、前述した基層幹部の回顧の通り、1954 年長江大洪水の犠牲者の死因は病死が溺死を上回ることが档案資料においても確認できた。病死が多発した要因は前述の通りで、洪水前に設置された「分洪区」による洪水の分流や、洪水直前の避難活動は溺死者を抑制した点で功を奏したと言えるが、档案資料からは病死者の多くが老人と子供で占められることも判明した。散在する自殺者のデータからも、災害時における弱者の状況がうかがえる。

第三に、最も重要な点は、洪水開始後には档案資料に詳細に記録されていた犠牲者のデータが、被害が拡大した 7 月頃から途切れたことである。

例えば、賈瑩瑩の論文は、「(湖北省の) 長江と洞庭湖沿岸(原語: 沿江滨湖地

区)で、6月22日までに溺死または家屋の倒壊で死亡した人数は260人であり、同月27日までの5日内に418人が死亡した。そのうち39人は災害のために自殺した」とする²⁷⁾。

他方、黄哲の論文では、別の档案資料を利用し同時期の被害状況を次のように記録している。すなわち、「6月20日までに全省で282人が死亡した」²⁸⁾。その後、激しい降雨のため、長江と漢江の沿岸と湖周辺（原語：滨湖地区）、一部の丘陵地帯で冠水と山津波による被害が広がった結果、「初步的な統計によると、6月27日までに全省の被災面積は14,406,680畝、被災人口は6,489,968人、住民418人が死亡した（自殺者9名を除き、溺死あるいは家屋の倒壊により死亡）」のである²⁹⁾。続いて、「1954年7月2日の統計時には、全省で被災した農田の数は14,406,680畝で総農田数の22.868%を占めた。被災人口が6,492,656人で総人口の34.628%を占め、426人が死亡した」³⁰⁾。そして、「7月15日まで、全省で被災した土地面積は17,293,560畝で総面積の27.45%を占めた。また、被災人口は7,720,541人で総人口の29.29%を占め、災害による死者数は1368人に達した」³¹⁾。

二つの論文で引用されたデータは、洪水の被害が生じた1954年6月20日から始まり、同月22日、27日までの間、または27日からの5日間、7月2日および同月15日までのものであり、自殺者の数も含めた詳細な記録になっている。これらのデータは、湖北省档案馆所蔵の洪水発生当時にまとめられたものである。とりわけ、黄哲の論文が引用した「湖北省生産救災弁公室」の編集した「湖北省災情統計表」の「救字第3号」（1954年6月22日）から「救字第7号」（1954年7月15日）までの資料は詳細である³²⁾。

7月以降、長江中流では記録的な降雨に伴う家屋の倒壊や山津波、堤防の決壊が相次ぎ、武漢市と荊江大堤を死守すべく、洪水の人為的な分流措置が取られた。「7月19日に行った沔陽禹王宮での分流（分洪）を皮切りに、洪湖の螺山、嘉魚の魯湖、監利の上車湾、枝江の百里洲、鄂城の三江口、潜江の澤口、荊江蓄洪区などの地域で分流の措置をとった」³³⁾。また、「堤防の決壊や冠水に洪水の分流が加わったことで、長江と漢江の間に、東の鄂城から西の沙市まで、横250キロメートル（原語：500華里）、縦150キロメートル（原語：300華

里)の水没エリアが発生し、深い所で3~6メートル(原語:1~2丈)、浅い所でも約1.2~1.5メートル(原語:4~5尺)になった。村々は完全に水没するか流された。倒壊家屋は70%以上にのぼり、沔陽、洪湖、監利、漢陽、漢川、黃梅、廣濟、嘉魚の8県は状況が最も深刻であった。特に沔陽と洪湖、監利の3県は、所々に残った堤防と高台を除き、陸地を見ることができなかった³⁴⁾。

洪水の被害状況が7月半ばごろから拡大したのに伴い、犠牲者の数も増加したと思われる。にもかかわらず、黃哲の論文では「救字第10号」(1954年10月に出版された)の資料から、被災人口と農田のデータを引用するものの、犠牲者に関する情報は見られない。また、賈瑩瑩の論文においても、犠牲者のデータは7月初めに途切れた。

第三章 病死の要因と疫病——住血吸虫症との関係

① 洪水後の疫病の蔓延

洪水の収束後に各種の疫病が蔓延した。そのなかに、コレラなどの悪性伝染病は含まれなかったが、死亡率は驚くほどであった。たとえば、湖北省の統計における病種別の死亡率はそれぞれ次の通りで、下痢が31.5%、胃腸炎が30.6%、下痢、風邪、マラリア(原語:疟疾)、肺炎は37.9%である³⁵⁾。

地方の档案資料において疫病の蔓延状況は次のように記される。つまり、「主な疫病は風邪や胃腸病、マラリア、下痢、持病の再発などであるが、罹患率(原語:患病率)は被災者全体の10~20%を占め、厳しい地域では30~50%に達し、死亡率が高い。なかでも、湖北省の状況は相当に厳しかった。ひとつは胃腸病、もうひとつはマラリアと下痢の罹患率が高かった。洪湖、監利、沔陽、潜江、漢陽、漢川、嘉魚、黃梅、廣濟、鄂城ら被災状況が深刻な10の県の統計では、被災人口は404.4万人おり、7月中旬から11月中旬までに106,274人が病死した。被災者の死亡率は2.6%に達し、最も状況が厳しかった監利県では3.2万人が病死し、全县人口の5%近くを占めたが、10%に達した郷もあった」³⁶⁾。

また安徽省では、1954年11月までに蔓延した疫病の罹患率が前年に比べて

急増した。すなわち、「発病の種類は腸チフス（原語：傷寒）、パラチフス（原語：副傷寒）、下痢、麻疹、ジフテリア（原語：白喉）、流行性乙型脳炎（日本脳炎）などがあり、1954年7月から11月までの罹患率は前年同時期と比較して、それぞれ腸チフス、パラチフスが72.3%、下痢が37.14%、マラリアが35.5%、麻疹が80.1%、ジフテリアが349.3%、流行性乙型脳炎（日本脳炎）が207.3%増加した³⁷⁾。

湖北省の10県は人為的に洪水を分流した地域と重なっており、監利県の地方幹部が回顧した洪水分流後の状況から考えると、両者の関連性も理解できよう。また、死亡率が高い疫病のひとつに挙げられている「持病の再発」とは具体的にいかなる「持病」なのか示されていないが、この地域の風土病である住血吸虫症との関連が強いものと考えられる³⁸⁾。

② 住血吸虫症との関係

次に潜在的な死因として住血吸虫症との関係を見てみたい。

林一山も王任重と同様に（上流からの）洪水被害が発生する前に、60～80%の農地はすでに冠水の被害に遭っていたと認めており、さらには当時長江中下流地域において深刻な住血吸虫症が蔓延していたと報告した。具体的には、「軽く見積もっても、（住血吸虫症の）脅威に直接晒された者が約1億人、罹患者は1000万人を超えた」とのことであった³⁹⁾。このように膨大な罹患者の存在は、それ自体が大きなリスクであったといえる。同時に、地域の風土病でもある住血吸虫症は、宿主であるミヤイリガイが水辺に生息するため、大洪水後にはとくに被害が広がることに鑑みれば、それによって命を奪われた犠牲者の多さが推測できよう。大洪水後には、住血吸虫症の罹患率および患者死亡率が急上昇する現象が指摘されており、1931年、1991年、1998年の長江大洪水時にも同様の傾向が確認されている⁴⁰⁾。

1954年大洪水後に、湖北省では14の県で住血吸虫症防止小組が相次いで成立した⁴¹⁾。また、省レベルの対応として、住血吸虫症防治所が同年11月18日から翌年2月まで30の県において住血吸虫症の予防および調査を行った。その結果、天門県では57,007人の罹患者のうち、末期患者と思われる者は5707

人であったことがわかった。また、潜江県の状況はより深刻で、全県の総人口の17%を占める6.27万の罹患者がおり、末期患者は2631人を数えた⁴²⁾。

王任重や林一山、基層幹部の新たな証言および档案資料からは、1954年長江大洪水における溺死者は、洪水後に病死した犠牲者の数に及ばないことが明らかになった。また、疫病による犠牲者は、湖北省監利県だけで30,000人を超えていたことも判明している。さらに、湖北省の天門県と潜江県の二県だけでも、洪水後に発見された住血吸虫症の末期患者が8000人を超えていた事実は驚くべきものである。住血吸虫症は慢性病であるものの急性症状を伴う場合もあり、末期患者の生存率が低いことを考慮すると、厳しい大洪水にさらされた約1000万人とされる罹患者の多くが命を落としたと推測される⁴³⁾。これらの事実を踏まえると、三峡ダム推進派は、1954年長江大洪水における犠牲者が冠水や被災後の過酷な環境による疫病を主な死因としていたことを曖昧にし、あたかも上流からの洪水被害によって発生したかのような印象を与える形で報告していた可能性がある。

おわりに

本稿では、主管部門の機関誌をはじめ、被災地域の基層幹部の回顧や地方政府の档案資料を照合し、1954年長江大洪水による犠牲者の数と死因の内実の一端を明らかにした。

第一に、1954年長江大洪水の犠牲者数は、1992年全人代における三峡ダム計画の議案説明で報告された「33,000人」を上回ることが確認できる。洪水発生当時の档案資料のうち、「内務部党组」による報告は「長江中下流7省における溺死と家屋倒壊、山津波による死者は1.2万人」としていたが、湖北省の档案資料「1954年湖北省災情統計資料（提要）」は「全省で災害による死者は31,672人」としており、湖北省だけで30,000人を超えていた。また、全人代での「死者33,000人」という報告は死因を明示していないが、洪水の翌年に内務部弁公庁が作成した資料には「湖北省では7月中旬から11月中旬まで病死者は106,274人」と記されている。これらを総合すると、長江大洪水による

溺死・山津波・病死を含めたこの流域の犠牲者は10万人を超えたと考えられる。

第二に、犠牲者の多くは溺死や山津波ではなく、疾病によって発生していた。被害地域のなかでは、1952年に整備された「荊江分洪区」からの組織的避難が溺死の抑制に寄与した一方、洪水収束後には各地で疫病が蔓延し、死者の大量発生につながった。とりわけ人為的な堤防決壊を強いられた湖北省監利県では、堤防上での劣悪な生活が10月まで続き、档案資料は「3.2万人」、基層幹部の回顧は「47,000人」が病死したと記録している。湖北省で罹患率が高いとされた10県は、いずれも人為的に洪水を分流した地域と重なっており、両者の関連性は基層幹部の証言からも裏づけられる。また、死亡原因の一つに「持病の再発」が挙げられているが、具体的な疾患は示されていない。洪水後には、湖北省の天門県と潜江県だけでも死亡率の高い住血吸虫症の末期患者が8,000人を超えていたという事実からも、この持病と地域の風土病である住血吸虫症との強い関連性が示唆される。

第三に、洪水は5月に始まり、7月以降に深刻化して分流が開始されたが、その時点から犠牲者に関する記録が途切れている。記録の中断や犠牲者数の不明瞭さには、いくつかの要因が想定される。第一に、7月以降の被害拡大で地方政府が対応に追われ、人的損失の情報収集や記録が十分に行えなかったこと。第二に、中国では歴史的に、中央政府への報告では物的損失に重点が置かれ、人的損失の記録が後手に回る傾向があったこと⁴⁴⁾。さらに、堤防決壊や人為的分流に伴う犠牲者数が隠蔽された可能性も否定できない⁴⁵⁾。1992年全人代の三峡ダム計画に関する議案説明で、1954年洪水の「死者33,000人」の詳細が示されなかったのも、こうした事情と関係していると考えられる。

とはいえ、この洪水が甚大な被害をもたらしたことは疑いなく、成立間もない革命政権を率いる最高指導層に大きな衝撃を与えたことも明らかである。その後、長江中下流における洪水対策としての三峡ダム計画は、主管部門の主導のもとで最高指導層の支持を獲得し、国家プロジェクトとして始動した。そして最終的には、1992年の全人代において建設決定に至ったことは拙著で論じた通りである⁴⁶⁾。他方、甚大な災害にさらされた地域社会に視点を移せば、大

災害下にあっても成立間もない革命政権がいかに社会の安定を維持し得たのかという問題が残る。この点については、別稿で改めて論じることとしたい。

【付記】 本研究は、2025 年度慶應義塾学事振興資金（個人研究）を受けた。ここに記して感謝の意を表したい。

- 1) 「周恩来在三門峡現場会議上の総結発言（1958 年 4 月 24 日）」、曹応旺「老一輩革命家与三峡」『党的文献』1997 年第 2 期。
- 2) 三峡ダム計画をめぐる紆余曲折の歴史と政策過程については、拙著を参照されたい。『中国共産党と三峡ダム——国家プロジェクトの政治過程』慶應義塾大学出版会、2025 年。拙著は、筆者が 2022 年に提出した博士論文『中国三峡ダム計画——資源、リスク、および権力』を加筆修正したものである。その際、第 3 章「1954 年長江大洪水のインパクト——『以三峡工程为主体』をめぐる」の第 1 節「1：1954 年の長江大洪水について」の内容は割愛した。本稿は、新たに入手した資料をもとに、この割愛部分を大幅に加筆修正したものである。
- 3) 鄒家華「關於提請審議興建長江三峡工程的議案的說明（1992 年 3 月 21 日）」『中国三峡建設年鑑 1994 年』34 頁、中国三峡出版社、1995 年。または、陳夕総編『中国共産党与三峡工程』166 頁、中共党史出版社、2014 年。
- 4) 水利電力部暴雨洪水分析經濟協調小組弁公室、南京水文水資源研究所編、胡明思、駱承政主編『中国歴史大洪水』中国書店出版、1992 年。駱承政（水利部南京水文水資源研究所）・楽嘉祥（水利部水利信息中心）主編『中国大洪水——災害性洪水述要』中国書店、1996 年。
- 5) 錢鋼・耿慶国主編『20 世紀中国重災百録』507 頁、上海人民出版社、1999 年。
- 6) 石武英「1954 年江淮水災区の疫情防控及其对建立農村合作医療制度的影響」『安徽史学』2021 年第 6 期。劉大禹「試論 1954 年水災和建国初期農村集体保障制度体制的關係——以 1954 年湖南水災為例」『船山学刊』2005 年第 4 期。鄧昀『1954 年湖南省水災与政府救助工作述評』湘潭大学修士号学位論文、2008 年。石武英『新中国成立初期湖北省水災与抗洪救灾研究（1949 年～1956 年）』華中師範大学博士号論文、2013 年。黄哲『1954 年湖北防汛救灾研究』河南大学号修士論文、2021 年。賈瑩瑩『湖北省 1954 年水災救助問題研究』華中科技大学修士号学位論文、2007 年。蔣積偉「建国初期災荒史研究述評」『当代中国史研究』2008 年第 4 期。孟昭華・彭伝榮共著『中国災荒史（現代部分）1949—1989』水利水電出版社、1989 年。孫紹騁著『中国救灾制度研究』商務印書館、2005 年。康沛竹著『中国共産党執政以来防災救灾的思想与实践』北京大学出版社、2005 年。趙朝峰著『中国共産党救

治災荒史研究』北京師範大学出版社，2012年。

- 7) 「長江平原湖泊区域総合開発計画の研究」楊世華主編、『林一山治水文選』233～252頁，新華出版社，1992年。
- 8) 「不建三峡工程荊江大堤難保安全（王任重在『荊江大堤志』首發式上的講話）（1990年4月17日）」『長江誌季刊』1990年2月号。
- 9) 「三峡工程研究經過」長江水利委員会編『三峡工程技術研究概論』19頁，湖北科学技術出版社，1997年。
- 10) 洪水の分流があった荊江県は，農業人口167,212人を含む204,762人のうち，事前の立ち退きや安全台の設置などによって分流による死者がまったく発生しなかったとの報告がある。「長江水利大事記（当代部分摘録）」『長江誌季刊』1992年第2期。出典：湘鄂贛蓄洪墾殖委員会編『荊江分洪区分洪前後の水政工作』1954年8月（「1955年」の誤植であると思われる）。また，1952年から洪水対策を進めてきた「荊江分洪区」では，溺死者は92人にとどまった。前掲，『20世紀中国重災百録』502頁。

「荊江分洪区」地域における溺死者の少なさは，全体として計画分流に伴う犠牲が最小限に抑制されたことを物語る。「1954年における被災者の秩序ある避難は，中国の災害史上初めてのことである」と評価されているが，秩序があったのはこうした地域が主であったと思われる。夏明方・康沛竹主編『20世紀中国災変図史』下，46頁，福建教育出版社・広西師範大学出版社，2001年。他方，「荊江分洪区」を内包する荊州地区の被災状況について，「被災人口は3,873,355人で，死傷者は25,586人」とする回顧もある。万華英・馬俊林「1954年湖北特大水災与救災」23頁，湖北省政協文史資料委員会編『湖北文史資料』（抗洪救災專輯）1998年第4輯，総第57輯。

- 11) 「荊江分洪区」の立ち退きでは，人間だけでなく，農作に不可欠な耕牛を草場のある場所へ移動させる措置も取られた。荊江県では，数人の幹部が約3000頭の耕牛を大変な苦勞の末に対岸へ移したが，3か月後に無事戻ったのはその半数にとどまった。前掲，『20世紀中国重災百録』504～505頁。
- 12) 長江主流と支流の漢江下流の堤防が61か所決壊し，「扒口」（人為的に堤防を爆破すること）は13か所で行われ，河川の堤防や住民の居住地を囲む堤防の決壊は数え切れなかった。駱承政（水利部南京水文水資源研究所）・楽嘉祥（水利部水利信息中心）主編『中国大洪水——災害性洪水述要』269頁，中国書店，1996年。
- 13) 前掲，「長江流域総合利用規画要点報告総論」『林一山治水文選』163～192頁。損失を被った農田については，三峡ダム建設の決定に至るまで一貫して「4755万亩」と引用され続けた点が興味深い。農田の損失に関しては，流域各省が比較的正確に報告していたと考えられる。たとえば，「長江全流域における1954年大洪水の

被災状況」では、農田損失のデータは各省分が揃っている一方、死者数に関しては記録が欠落している省が少なくない。中文出版物服務中心編『中共重要歴史文獻資料滙編』第30輯、『稀見統計資料專輯』第106分冊『長江流域社会經濟基本資料滙編（水利部長江水利委員會編，1990年12月）』（秘密保存15年），47頁，米国カリフォルニア大学バークレー校東アジア図書館所蔵，2012年。

- 14) 同上。「長江流域総合利用規画要点報告総論」『林一山治水文選』163頁の注釈。
- 15) 内務部は，1949年から1954年までは「中央政府内務部」と称され，1954年から1969年までは「中華人民共和国内務部」と呼ばれた。1978年に民政部が設立され，1969年に廃止された内務部の一部機能を引き継いでいる。党組は，行政部門に置かれた共産党の組織であり，党の方針や政策を徹底させる役割を担う。
- 16) 同時に林一山は，山津波（原語：山洪。ダムの決壊も含む——筆者注）による大量の死亡事故があったが，その死者の数は「約4900人」に計上されていないことを認めている。
- 17) 許正甫「長江中下流平原区10年水利建設的成就——蓄洪壩殖工程的實施」『人民長江』1959年10月号。
- 18) 李銳も後年，林一山が1954年の洪水では「緊急の分流などの措置を取り，武漢市と荊江大堤の安全を確保することに成功したが，依然として4900人の死者を出した」と南寧會議において発言したことを証言している。出典：「回憶南寧會議討論三峽問題」『李銳文集——論三峽工程』第11卷，209～231頁，中国社会科学院出版社・香港社会科学教育出版社，2009年。また，李銳は自著のなかでも，この洪水と関連する説明に，「洪水被害に遭った農地の約80%はその前にすでに冠水の被害に遭っていた」，「死者が4900人までに減少した」と林一山が南寧會議に提出したこの報告を引用している。出典：李銳著『論三峽工程』158頁，湖南科学技術出版社，1985年。
- 19) 前掲，「不建三峽工程荊江大堤難保安全（王任重在『荊江大堤誌』首發式上的講話）（1990年4月17日）」。
- 興味深いことに，王任重的寄稿した『荊江大堤誌』の序文には，このような記述が見られない。王任重「『荊江大堤誌』序」『長江誌季刊』1990年2月号。
- 20) 「今回被災した各省で計画的，組織的に立ち退きした被災民は1300万人に達した」と言われているが，王任重が「告白」した状況はほかでも起こっていたかを検討する余地がある。前掲，『20世紀中国災変図史』下，47頁。
- 21) 張佑清「我所經歷的兩次抗大洪大澇」中国人民政治協商會議湖北省委員會文史史料委員會編『湖北文史集粹』518～532頁，湖北人民出版社，1999年。また，『監利堤防誌』でも8月末には1568人が死亡し，県内に残った20万人あまりのうち，疫病により年末まで4.79万人が病死した。前掲，『20世紀中国災変図史』下，4～5

頁。

- 22) 長江水利委員会水文局編著『1954年長江の洪水』52頁，長江出版社，2004年。
または、『荊江大堤誌』編纂委員会編『荊江大堤誌』361頁，河海大学出版社，1989年。
- 23) 前掲，張佑清「我所經歷の兩次抗大洪水」。
- 24) 楊傑「難忘の1954年」中共湖南省委党史研究室，湖南省中共党史連絡組徵稿『回顧録——洞庭湖治理与建設』198～210頁，湖南省政協機關印刷廠，2007年。
- 25) 前掲，『中国大洪水——災害性洪水述要』270頁。または，『20世紀中国重災百録』504頁。
- 26) 前掲，「難忘の1954」『回顧録——洞庭湖治理与建設』204頁。
- 27) 湖北省档案局（館）編『湖北省1954年防汛抗洪档案選編』内部編印1998年6月，206頁。出典：賈瑩瑩『湖北省1954年水災救助問題研究』華中科技大学修士号学位论文，13～14頁，2007年。
- 28) 湖北省生産救灾弁公室：「湖北省災情統計表」（救字第3号），1954年6月22日，湖北省档案館 SZ067-001-0256-0001。出典：黃哲『1954年湖北防汛救灾研究』河南大学修士号論文，64頁，2021年。
- 29) 中共湖北省委，湖北省政府「關於召開防汛救灾緊急會議的報告」1954年7月6日，湖北省档案館 SZ001-002-0209-0003。出典：同上，黃哲『1954年湖北防汛救灾研究』河南大学修士号論文，66頁，2021年。
- 30) 湖北省生産救灾委員會弁公室：「湖北省1954年灾情初步統計表」（救字第5号），1954年7月2日，湖北省档案館：SZ067-001-0256-0002。出典：同上，黃哲『1954年湖北防汛救灾研究』河南大学修士号論文，66頁，2021年。
- 31) 湖北省生産救灾委員會弁公室：「湖北省1954年灾情初步統計表」（救字第7号），1954年7月15日，湖北省档案館 SZ067-001-0256-0004。出典：同上，黃哲『1954年湖北防汛救灾研究』河南大学修士号論文，66頁，2021年。
- 32) 「救字第4号」から「湖北省生産救灾委員會弁公室：湖北省1954年灾情初步統計表」との表記になっている。
- 33) 湖北省档案局（館）編『湖北省1954年防汛抗洪档案選編』内部編印1998年6月，第206頁。出典，賈瑩瑩『湖北省1954年水災救助問題研究』華中科技大学修士号学位论文，13頁，2007年。洪水の分流は「7月19日に沔陽禹王宮から始まった」としているが，これは長江の支流である漢江沿いにある沔陽県の禹王宮での分流である。「1954年長江中流分洪潰口示意图Ⅰ—04」にある表示，出典：前掲，『1954年長江の洪水』。
- 34) 同上，湖北省档案局（館）編『湖北省1954年防汛抗洪档案選編』内部編印，206頁，1998年6月。

- 35) 前掲、『20 世紀中国重災百録』506～507 頁。
- 36) 中華人民共和国内務部弁公庁編『一九五四年水災地区生産救災工作資料滙編』1955 年 10 月印，第 193 頁，湖北省檔案館館藏，档号：SZE—62。出典：石武英「1954 年江淮水災区の疫情防控及其对建立农村合作医疗制度的影响」『安徽史学』2021 年第 6 期。
- 37) 同上，中華人民共和国内務部弁公庁編『一九五四年水災地区生産救災工作資料滙編』，1955 年 10 月印，第 193，303，467，528，298，529 頁。
- 38) 住血吸虫症は，寄生虫である住血吸虫によって引き起こされる感染症であり，世界保健機関（WHO）により世界で最も重要な寄生虫病の一つに位置づけられている。原因となる住血吸虫は，アフリカ，アジア，中南米などで広く分布しており，中国の長江流域も歴史的に流行地域として知られる。住血吸虫症による直接的な死亡率は比較的低いとされる（感染者全体の 0.1～0.3% 程度ともいわれる）。洪水や戦乱などによる衛生環境の悪化で感染が急増した場合，合併症や二次感染（下痢，肝不全など）で死亡率が上昇する。

中国で現在確認されている最古の住血吸虫症患者は漢代にさかのぼる。1970 年代，湖南省長沙市の馬王堆 1 号漢墓から出土した女性の遺体および湖北省江陵県の鳳凰山 168 号墓から出土した西漢時代の男性の遺体が考古学的調査で検査され，いずれも住血吸虫の卵が確認された。これらは，中国における有史以来確認可能な最初の住血吸虫症の事例である。住血吸虫症の感染は，川や湖などの淡水中に生息する巻貝（ミヤイリガイ）を中間宿主とする寄生虫の幼虫（セルカリア）が人の皮膚から侵入することによって生じる。春から夏にかけては，この病気が最も発症しやすい時期である。長江流域ではちょうどこの時期に水害が頻発したため，洪水が発生すると，感染を媒介する巻貝が洪水によって広範囲に拡散し，住血吸虫症の伝播が加速して疫病は急速に拡大した。出典：王小軍著『社会与国家——20 世紀長江中下流地区の血吸虫病災害与対応』6～10 頁，江西人民出版社，2011 年。
- 39) 前掲，「長江流域総合利用規画要点報告総論」『林一山治水文選』163～192 頁。
- 40) 1948 年 12 月に湖北省政府衛生処が制定した「湖北省血吸虫病防治計画」の報告内容。出典：前掲『社会与国家——20 世紀長江中下流地区の血吸虫病災害与対応』36～37 頁。また，胡雪軍・董罡（総述），魚敏（審校）「洪涝災害对血吸虫病流行的影響」『中華災害救援医学』2015 年第 3 卷，第 12 期。
- 41) 同上，『社会与国家——20 世紀長江中下流地区の血吸虫病災害与対応』43 頁。
- 42) 『潜江県誌』中国文史出版社，575 頁，1990 年。出典：同上，『社会与国家——20 世紀長江中下流地区の血吸虫病災害与対応』43～44 頁。
- 43) 夏明方は，民国期に長江中下流において，疫病による死者が 1 万人以上出た災害は 4 回あり，その総数は 16 万人とした。それに対して，王小軍はこの統計数字

に長期にわたって地域に根付いた風土病や慢性病、とりわけ住血吸虫症による病死も含まれるなら、民国期の長江中下流地域における疫病の死者は優に 16 万人を超すと指摘した。夏明方著『民国時期自然災害与鄉村社会』72, 78～79 頁, 89 頁, 中華書局, 2000 年。同上,『社会与国家——20 世紀長江中下流地区的血吸虫病災害与対応』69 頁。

また、資料の出典は不明ながら、疫病による死者の割合が溺死より高いことに加え、そもそもこの洪水による犠牲者は優に 30,000 人を超えるとの指摘がある。すなわち、「湖北省の統計によると、被災者 1000 万人のうち疾病による死亡は約 10 万人（正常死亡者含む）で、1%を占める。（中略）。湖北省の状況では、溺死者は、0.03%にも及ばず、疫病と正常死亡を含む死亡率は約 1%である。この比率に基づき試算すると、1954 年長江大洪水による被災地域の溺死者はおおよそ 22,000 人であり、全体の死者は 50～70 万人になる」。前掲,『20 世紀中国重災百録』506～507 頁。

- 44) 夏明方著『文明的“双相”災害与歴史的纏綫』90～93 頁, 広西師範大学出版社, 2020 年。
- 45) 毛沢東は、武漢市に対して「慶賀武漢人民戦勝了 1954 年洪水, 還要準備戦勝今後可能發生的同様嚴重的洪水」（「武漢人民が 1954 年の洪水に勝利したことを祝うとともに、今後発生するかもしれない同様の洪水に備える必要がある」）との題辞を送った。武漢市は当時、直轄市から湖北省の管轄に入ったばかりであった。この洪水対策の至上課題は荊江大堤とともに武漢市を守ることであったが、「図表 2：地方档案馆資料にみる 1954 年長江大洪水犠牲者のデータ」に示したように、武漢市は大きな被害を免れている。だが、長江と漢江兩岸の地域と人々は大きな犠牲を強いられており、まさに周恩来が言及したように最高指導層ではこの洪水に言及すれば「みんな青くなっていた」という状態であった。毛沢東があえて武漢市だけに祝辞を送ったのはその被害の深刻さを承知していたことの表れと言える。
- 46) 拙著,『中国共産党と三峡ダム——国家プロジェクトの政治過程』。

図表 1 1954 年長江大洪水犠牲者のデータ（主管部門と先行研究の資料）

長江中下流		湖北省	出典
○	死亡 4900 人		1959 年作成「長江流域総合利用規画要点報告（総論）」楊世華主編『林一山治水文選』165 頁，新華出版社，1992 年。
○	一か所：死亡 4900 人 一か所：溺死 4495 人 (原語：「溺死した人口は 1931 年の 3.1 %」。1931 年洪水溺死者は 14.5 万人。)		許正甫「長江中下流平原区 10 年水利建設的成就——蓄洪墾殖工程的実施」『人民長江』1959 年 10 月号
○	死亡 4900 人		李銳著『論三峡工程』158 頁，湖南科学技术出版社，1985 年。 林一山の「要点報告（総論）」の引用
○	死亡 4900 人		李銳「回憶南寧會議討論三峡問題」林一山の南寧會議における報告の引用
○	死亡 30,000 人あまり	死亡 31,600 人	長弁『長江誌』総編室 陳星鈞「1954 年長江的洪水及抗洪闘争紀実」『水利史專刊』1989 年第 4 期。
○		「洪水ではそれほど死者が発生しなかったが、むしろ、水が引いてから全省で約 3 万人が病死した。」	「不建三峡工程荆江大堤難保安全（王任重任在『荆江大堤志』首発式上の講話）（1990 年 4 月 17 日）」『長江誌季刊』1990 年 2 月号。
○		死亡 31,770 人	水利部長江水利委員会編『長江流域社会経済基本資料滙編』（秘密保存 15 年）47 頁，1990 年 12 月。
○	記述なし		（元水利部長）錢正英主編『中国水利』水利水电出版社，1991 年。
	上巻 p2：「33,000 人」 下巻 p343：「死亡 30,000 人あまり」 p344 の図表：「死亡 33,169 人」	死亡 30,582 人	水利電力部暴雨洪水分析經濟協調小組弁公室・南京水文水資源研究所編，胡明思・駱承政主編『中国歴史大洪水』内部発行，中国書店出版，1992 年。

○	死亡 33,000 人		鄒家華「關於提請審議興建長江三峽工程的議案的說明（1992 年 3 月 21 日）」
○	約 30,000 人		『中国三峽建設年鑑（1994 年）』263 頁，中国三峽出版社，1995 年。
	「洞庭湖地域」に限っても疫病による犠牲者が 30,000 人を超えた。		駱承政（水利部南京水文水資源研究所）・樂嘉祥（水利部水利信息中心）主編『中国大洪水——災害性洪水述要』270 頁，中国書店，1996 年。
○	約 30,000 人		「三峽工程研究経過」長江水利委員会編『三峽工程技术研究概論』19 頁，湖北科学技术出版社，1997 年。
○	溺死 33,169 人	溺死 30,582 人	長江水利委員会洪慶余主編『中国江河防洪叢書（長江卷）』86 頁，中国水利水电出版社，1998 年。
	湖北省の比率で試算すると，全流域での溺死者はおおよそ 22,000 であり，死者は 50～70 万人になる。	湖北省の状況では，溺死者は，被災者 1000 万人の 0.03 パーセントにも及ばず，疫病と正常死亡を含む死亡率は約 1 パーセントである。	錢鋼・耿慶国主編『20 世紀中国重災百録』506～507 頁，上海人民出版社，1999 年。
	溺死 30,000 人あまり		夏明方・康沛竹主編『20 世紀中国災變図史』下巻 2 頁，福建教育出版社・広西師範大学出版社，2001 年。
○	溺死 30,000 人		長江水利委員会宣伝出版中心長江総編室編『長江誌』第 7 巻「大事記」160 頁，中国大百科全書出版社，2006 年。
		死亡 3.06 万人	王小軍著『疾病，社会与国家——20 世紀長江中流地区的血吸虫病災害与応対』57 頁，江西人民出版社，2011 年。

筆者が関連資料に基づき作成した。

注：「○」印は，主管部門である水利部または長弁の関係者によるデータである。

図表 2 地方档案館資料にみる 1954 年長江大洪水犠牲者のデータ

地域	内容	出典
湖北省	13～15 頁： ・沿江浜湖地区： 6 月 22 日までに，被災人口は 4,939,909 人，流されて溺死または家屋の倒壊で死亡した人数は 260 人。 6 月 27 日までの 5 日以内に，418 人死亡（39 人は災害のために自殺，残りは，山津波による溺死あるいは家屋の倒壊による死亡）。① 7 月 19 日から洪水の分流が開始し，9 月 3 日までの全省の被災人口は，9,904,801 人で，総人口の 37.57% を占めた。 ・全省での「災害による死亡」は 31,672 人。② 罹災後，人，豚，牛に疫病が蔓延。紅安県では，一区の杏花郷の病人が 5，60 人で，金沙郷李業互助組の 8 人の労働力のうち 4 人が病気になった。八里湾衛生所には毎日数十人の患者がいる。③	賈瑩瑩『湖北省 1954 年水災救助問題研究』華中科技大学修士号学位論文，2007 年。 利用資料： ① 湖北省档案局（館）編『湖北省 1954 年防汛抗洪档案選編』内部編印 1998 年 6 月，206 頁。 ② 同上，『湖北省 1954 年防汛抗洪档案選編』373 頁。その次頁にある「1954 年湖北省受災人口・田畝統計表」には死者の数値はない。 ③ 同上，『湖北省 1954 年防汛抗洪档案選編』322 頁。
湖北省	64 頁：6 月 20 日まで全省で死者 282 人。① 66 頁： ・長江と漢江沿いと湖周辺地域，一部の丘陵地帯： ひどい冠水と山津波による災害により，初歩的な統計によると，6 月 27 日までに，全省で被災した農地 14,406,680 畝，被災人口は 6,489,968 人，倒壊した家屋は 84,200 軒，死者 418 人（自殺者 9 名を除き，溺死あるいは家屋の倒壊により死亡）。② 66 頁： 1954 年 7 月 2 日までの統計で，全省で被災農地 14,406,680 畝，被災人口 6,492,656 人，死者 426 人。③ 66 頁： 7 月 15 日までに，全省で被災した農地面積は 17,293,560 畝，被災人口は 7,720,541 人，死者が 1368 人に達した。④	黄哲『1954 年湖北防汛救災研究』河南大学修士号論文，2021 年。 利用資料： ① 湖北省生産救災弁公室『湖北省災情統計表』（数字第 3 号），1954 年 6 月 22 日，湖北省档案館藏 SZ067-001-0256-0001。 ② 中共湖北省委，湖北省政府『關於召開防汛救災緊急會議的報告』1954 年 7 月 6 日，湖北省档案館藏 SZ001-002-0209-0003。 ③ 湖北省生産救災委員会弁公室『湖北省 1954 年災情初步統計表』（救

	72～73 頁：全省で災害による死者は 31,762 人。⑤	字第 5 号), 1954 年 7 月 2 日, 湖北省档案館藏 SZ067-001-0256-0002。 ④ 湖北省生産救災委員会弁公室『湖北省 1954 年災情初步統計表』(救字第 7 号), 1954 年 7 月 15 日, 湖北省档案館藏 SZ067-001-0256-0004。 ⑤ 「1954 年湖北省災情統計資料」(提要), 湖北省档案局(館)編印: 『湖北省 1954 年防汛抗洪档案選編』1998 年, 第 373 頁。
湖北省	7 月中旬から 11 月中旬まで病死した総人数は 106,274 人(正常死亡者を含む), そのうち最も状況が深刻な監利県では病死者が 3.2 万人。①	石武英「1954 年江淮水災区の疫情防控及其对建立農村合作医療制度的影響」『安徽史学』2021 年第 6 期。 利用資料: ① 中華人民共和国内務部弁公庁編『1954 年水災地区生産救災工作資料滙編』1955 年 10 月印, 第 193 頁, 湖北省档案館藏 SZE—62。
湖南省	41 頁: 湖南省常德の各区で, 被災者は 209,235 人に達し, 溺死者は 63 人。1954 年 7 月に被災地域の病人が 5.58 万人に達した。9 月に 44 万人に急増し, 被災者の 21% に達した。10 月中旬までに全区の病死者は 3.47 万人に達し, 死者は嬰兒と老人が多い。①	劉大禹 「試論 1954 年水災と建国初期農村集体保障制度体制の關係——以 1954 年湖南水災為例」『船山学刊』2005 年第 4 期。 利用資料: ① 常德市志:《賑災》, 中国常德網 www.cdcity.gov.cn/changde
	7 頁: 全省で 5 月初めから 6 月 19 日まで, 68 の県で山津	鄧昀「1954 年湖南省水災与政府救助工作述評」湘

湖南省	波が4回発生し、115人が死亡した。① 8頁：「滨湖区堤垸潰漫情况表」（本表の統計は7月30日までの報告）には、死者の数は見られない。② 9～10頁：「湖南省1954年水災情况初步統計表」に示された数字：死者：溺死2131人，負傷者1273人（文中では1266人），病死者は常德区のみデータあり，1219人。③ 10頁：全省で潰垸（住居が完全に水没する）による死者263人。④ 11頁：主に胃腸炎，下痢，マラリアなどの疫病が被災地で流行しはじめた。安郷県では，5万人あまりが発病し，全县総人口の20%を占めた。患者に対して医者と薬品が過度に不足し，治療を受けられない患者が多かった。統計によると，全县で疫病の蔓延による死者は2224人。⑤ 11頁：例えば郴県では，1954年冬に入り，農民が生活難のために農田を手放すこと，農業器具ないし子供を売ること，または本籍地からの逃亡（原語：出外逃荒）などの現象が連続して発生した。そのなかで致死事件が13件起こり，病死と餓死が3人，首吊り自殺が6人，乞食や野菜を求める道中で転落死あるいは溺死した者が4人いた。⑥ 21頁：滨湖区10県で被災者102万人を成功裏に立ち退かせた。⑦	潭大学修士号学位論文，2008年。 利用資料： ①『省民政庁關於受災情况報告和滨湖地区潰垸，災区轉移安置工作的做法与經驗』湖南省档案館藏：全宗号167，目錄号1，案卷号446。 ②『省民政庁關於水，火災情調查，援救濟款的通知，報告，統計表』湖南省档案館藏：全宗号167，目錄号1，案卷号460。 ③『湖南省1954年水災損失基本数字初步統計』，湖南省档案館藏：全宗号M，目錄号1，案卷号201。 ④ 同上。 ⑤ 安郷県政協學習文史委，安郷県水利水電局編《安郷文史・第5輯・水利輯》湖南省安郷県教育印刷廠，1997年版，第50頁。 ⑥《省生産救災委員会關於「生産救災簡報」（1-34期）》，湖南省档案館藏：全宗号167，目錄号1，案卷号532。 ⑦ 内務部農村福利司編『建国以来災情和救災工作史料』法律出版社1958年版，第116頁。
	35頁： 長江中下流5省全体で3.3万人が死亡した。	康沛竹著『中国共产党執政以来防災救災的思想与实践』北京大学出版社，

長江中下流 5省		2005 年。 利用資料： 中華人民共和国国家統計局，中華人民共和国民政部編『中国災情報告（1949-1995）』中国統計出版社，1995 年版，第 25 頁。
長江中下流	1 頁： 長江洪水による水没した耕地は 4700 万畝あまり，3.3 万人が死亡し，京広鉄道が 100 日間不通になった。①	石武英『新中国成立初期湖北省水災与抗洪救災研究（1949 年～1956 年）』華中師範大学博士号論文，2013 年。 利用資料： ①「中国歴史上水災盘点」環球歴史網，2012 年 7 月 26 日。
長江中下流 7 省	激甚な被害を受けた安徽，湖北，湖南，江西，江蘇，河南，河北の 7 省の報告によると，被災した人口は 5900 万人あまり，その内，被災度が高い者は 3900 万人あまりで，溺死と家屋倒壊，山津波による死者は 1.2 万人。①	石武英「1954 年江淮水災区の疫情防控及其对建立农村合作医疗制度的影响」『安徽史学』2021 年第 6 期。 利用資料： ①『内務部党組關於水災地区救災工作問題的報告』湖北省檔案館藏 SZ1—2—244。
長江中下流 7 省	41 頁： 安徽，湖北，湖南，江西，江蘇，河南，河北などの省がひどい洪水と冠水に遭い，長江堤防 60 か所あまりが決壊した，江漢平原と岳陽，黄石，九江，安慶，蕪湖などの都市が水没し，317 万公頃土地が水没した。京広鉄道が 100 日あまり中断し，3 万 3 千人が死亡した。（出典の明示はない）	劉大禹 「試論 1954 年水災和建国初期農村集体保障制度体制的關係——以 1954 年湖南水災為例」『船山學刊』2005 年第 4 期。
武漢市	73—74 頁： 武漢市の死者 74 人（1954 年 8 月 15 日からのデータであり，病死者が含まれていない）①	黃哲『1954 年湖北防汛救災研究』河南大学号修士論文，2021 年。 利用資料：

	110 頁： 洪水期間中に、治療のため収容した洪水現場の作業員 5671 人のうち 25 人が死亡した。収容した被災者 1621 人のうち死亡したのは 136 人。洪水期間中に収容した伝染病患者 3268 人のうち、82 人が死亡。 ② 110～111 頁： 「1954 年防汛時期防汛員工災民間診住院統計」（統計時間：1954 年 7 月 1 日から 9 月 30 日まで） 洪水現場の作業員（防汛員工）23 人死亡し、被災者は 128 人が死亡。③	① 武漢市防汛総指揮部総弁公室『武漢市防汛資料有關統計數字部分』（1954 年 10 月 4 日），武漢市檔案館藏 XX000129-WS01-0070-0003。 ② 武漢市防汛総指揮部衛生處『防汛救災衛生工作總結』武漢市防汛総指揮部防汛工作概況編審委員會編印『武漢市 1954 年防汛文獻匯編』1954 年，第 207 頁。 ③ 武漢市防汛総指揮部総弁公室『武漢市防汛資料有關統計數字部分』（1954 年 10 月 4 日），武漢市檔案館藏 XX000129-WS01-0070-0003。
--	--	--

筆者が関連資料に基づき作成した。